

# ものづくり企業の生き残りは 高い技術を生かす「創造力」がキー。 そのオリジナリティを守るのが特許戦略！

本気でものづくりに取り組む企業ほど真剣な知的財産の保持。

今回のMOOV,pressは戦略的な特許のあり方にフォーカスします。

今回は株式会社モノプラス代表取締役の大音豊和氏に進行役をお願いし、先端的素材開発事業を推進する株式会社アイテック代表取締役の飯田勝康氏、独自の節水ノズルで幅広い分野に進出する株式会社DG TAKANO代表取締役の高野雅彰氏に集まってきました。旬のテーマである「知的財産権」についてのホットなディスカッションをお届けします。

## 特許状況の調査は、ものづくりの基本

大音 私は樹脂を加工して試作品を作るという事業に並行して、もうちょっと上流から新商品の事業計画づくりのお手伝いをするアドバイザー的な仕事が増えてきました。知的財産の専門家ではないのですが、その辺りの事情から今日の進行役をお声掛けいただいたのだと思います。まず、それぞれの会社の事業展開と知財への取り組みについてお聞きしたいと思います。

飯田 私のところは、高温高压技術を生かした超臨界システムで水・炭酸ガスを反応場として新しい材料づくりと装置の開発を産学連携で行ってきました。具体的には、たとえば自動車や家電といった製品のハイパワー化に対応し、放熱機能をクリアする材料を提供していくという取り組みです。大学と一緒に研究開発をする中で得た知財を使ってビジネスをしています。大学の研究開発は前例のないものに挑戦するというのが前提ですので、特許取得はすぐにできました。

高野 私はもともとIT業界で営業していました。それを3年でやめて起業しようというとき、知人から他社製の節水コマを売らないかという話がありました。そのコマの製造価格をみると、当社ならはるかに安い値段で作ることができるものだったのでこの分野に興味を持ったのです。ニッチな分野なので一番になれる可能性があることが魅力でした。そこでまず、同業他社がどのような特許を取得しているかをチェックしました。

飯田 新しいモノを作ろうという時に、まず特許状況を調べるとするのは基本ですね。大学とのコラボの場合は、先例のないものに挑戦するというのが前提ですから、そのあたりはクリアしやすいと言えますね。

## 特許は「未来への投資」

大音 特許の重要性をどのように認識されておられますか？

高野 10分の1の水量で高い洗浄力を発揮するという非常に良い製品ができて、特許の取得にとりかかりました。水は世界の問題なので複数の国で基本特許、さらに周辺特許を取りました。うちのようなベンチャー企業が会社を守る手だけでは知財権と契約書だと考えています。ですから「未来への投資」と考え、知財関係にはかなりの額を投入しています。

飯田 特許はものすごく高つく。一千万単位のお金がすぐに必

要になりますよね。

高野 いろんな国で特許を取りたいのですが、まとまった費用が必要なので厳選しないといけない。日本では何個か取っているけれど、アメリカではこれとこれにしておこうとか。うちの特許の穴を抜ける技術力のある国は厚くマークしないといけないし、販売するだけの国は一応権利だけとっておけばいいので薄くても良いとか。極端に言うと「今日ご飯食べなくても、特許にはお金をかける。未来でしっかり食べられるように(笑)」の気持ちで取り組んでいます。

飯田 特許はそうですね。自社のマーケットをどこにするかということで取り方が決まる。すぐには売らなくても、将来売れるかもしれない国でも取っておくとか。リスク対策ですね。

大音 それだけに知財に投資するというのは勇気のいることでもありますね。

高野 いや全然そうではなくて、これが一番だろうと思います。

大音 徹底していますね。

高野 知財で守らないで何で守るのか、ということです。だからといって、それで守れるかと言ったら、100パーセント守れるものでもないですけど。特許を無視して堂々と真似するような違反も沢山あります。ただ知的財産権がないといろんな会社との交渉の場にも立てない。たとえば大企業がうちに対していろんな問い合わせをしてきて、当社の技術を自社製品に組み込めるように作って欲しいとかいろいろ言われるんです。うちの特許を調べて抜けられないからです。抜けられたらわざわざうちに頭を下げては来ない。

## 特許出願のハードルを超えるには

大音 これから特許に取り組もうという会社は、まず何をすれば良いのでしょうか？

飯田 特許戦略というのは本当に難しい。専門家のサポートを活用するのが賢明でしょうね。

高野 まず弁理士の先生にあたって、いろいろ相談してみることですね。そして知的財産権というものに慣れていくことが大切だと思います。弁理士の先生が書く文章はもちろん日本語なのですが最初は意味がわからなかった。それが二回目、三回目になってくるとだんだん読めるようになってきて、もっとこうした方が良い特許になるのでは、と意見も出せるようになりました。いろいろ相談しながら文書を作っていくようになります。

大音 弁理士の先生にだけ任すのではなく？

高野 もちろんです。技術的なことを知っているのは自分だけです。弁理士の先生がその内容を理解しないと書けないですし、もったいない書き方になったりする。たとえば抜け穴が100パターンあるうちの99個までつぶせて、残り1個しか抜け穴がないような書き方。あるいは80個までつぶせるとか、実は20しかつ



電力不要、蛇口に取り付けるだけでOK。「節水率が高く、かつ洗浄力も高い」という相反する2つの課題を解決した株式会社DG TAKANOのBubble90シリーズ。



株式会社アイテックの工場に展示された、産学連携から生まれた機能性ナノ粒子合成技術の成果。